

小学校英語の学習会に参加して

北斗市立大野小学校

教諭 佐々木 朗

学習指導要領改訂に伴い小学校5、6年生で週1時間の外国語活動が導入されることが正式に決まった。私も英語教育に携わってきた者の一人として、この導入に積極的に取り組んでいきたいと考え、学習会に参加した。

日時 8月9日(土) 14:00~17:00

場所 札幌市 かでの2・7 かでのホール



事業名 地域で、小学校からの英語教育を考えるシンポジウム2008in札幌

テーマ 小学校英語必修科の課題と対策

主催 NPO法人小学校英語指導者認定協議会

後援 文部科学省・北海道教育委員会・札幌市教育委員会

協力 NPO法人教育支援脅威会北海道

参加費 無料(招待者)

内容

第一部 基調報告

吉田 博彦(中央教育審議会専門委員)

演題 新しい指導要領の内容について

~新しい学習指導要領における小学校英語の必要性~

第二部 公開討論会「小学校英語必修科の課題と対策」

パネリスト

杉浦 久弘(北海道教育委員会次長)

吉田 研作(上智大学外国語学部教授 小学校英語指導者認定協議会理事)

中山 兼芳(小学校英語指導者認定協議会会長 日本児童英語教育学会元会長)

小川 芳幸(本別町教育委員会管理課学校教育担当)

安江こす系(NPO教育支援協会北海道代表理事)

コーディネーター

吉田 博彦(小学校英語指導者認定協議会専務理事 中央教育審議会専門委員)

はじめに

冬に札幌で小学校英語の勉強会があり参加してきた。その時に札幌市の小学校英語のML(メーリングリスト)に入れてもらい、今回の企画もそこから流れてきた。札幌の午後からの研修で帰りも遅くない、おまけに旅費も支給してくれそうだということで、早速申し込みました。

札幌まではいつもJR。行き帰りののんびりさを考えるととても車では行く気になりません。最近渡島大野駅はよく利用し、

この日もここからスタートしました。函館、札幌は11000円（列車限定）で、指定席を取れます。朝7時4分発で、帰りは午後9時48分函館着（6時13分札幌発）です。これで、だいたいの日帰りの札幌研修は可能です。

札幌について、パソコンショップをのぞき、昼食を食べて研修に臨みました。

内容のまとめ

はじめに

会は、かでののホールで行われ、J-SHINE（小学校英語指導者認定協会）の方々（研修のポイントになるみたいです）を初め、私を含めて学校の先生（招待者ということで無料で入れてもらえました）そして一般の方々を対象のようでした。

かなでーのの小ホールぐらいの大きさでしたが、2、3割の人が入ったぐらいでした。それでも道外からの参加者もいたりして、また、道内も私もそうかもしれませんが遠方から参加している人も結構多かったようでした。

また、会場は若い音の方が圧倒的に多く、英語指導者は女性が多いというイメージはその通りだなあと感じました。男性は1割くらいかなあというところでした。

基調報告

国レベルで、小学校に英語が必要かどうかということは25年前からずっと検討されてきた。審議会では原則全会一致で決めるということがあり、なかなか決まらなかった。時代が変わり、国際化が広まる中で、やっと決まったという感じである。

最初の国際化は国際理解から始まった。

それからコミュニケーションとなった。1986年から始まった。1993年に外国語教育の改善に関わり、研究校で実践され、具体化されてきた。日本はそれから時間がだいぶかかった。2002年の改善には決まらなかった。国際理解の中で英語教育活動も始まった。2004年から次の検討が始まった。2004年には決めるということだったが、学力検査などで決まらなかった。2005年でも国庫負担の問題もあり、決まらなかった。そのあとやっと決まったという感じでNHKでも放送された。文科省がやると反対論議が高まってきた。小学校で英語を教えるのは日本を滅ぼすなどというフレーズもあった。言語力、基礎学力、体力の向上の中、授業時間をふやし、小学校の英語がとりあえず、必修となることが決まった。国民全てに歓迎をうけて始まるものではない。



指導要録全体を確認すると、1月答申、3月告示、4月解説書が作られる。2009年4月に新課程の前倒しで、英語はやりたいところは9年4月からやっていい。横浜市は360の市で来年から小学校1年生から英語をやるということになった。2009年から動くところが多いだろう。201

1年から完全実施となる。これから3年で体制が決まってくる。これから様々な課題が出てくるだろう。小学校5年生から週1時間の実施。担任とALT、地域人材とのTTを基本とする。中教審では何年生かやるから話し合った。1年生、3年生では体制が組めなかったということである。英語ノートは教科書ではないが見本として配られたものがあるが、議論してもらいたい。3年生からになる可能性はまだ残っている。6億1千万の予算である。

外国語活動の実施にあたっては、述べてきたように様々な形がある。今回「地域で」という冠をつけたが、特に北海道は広い。それぞれの地域が、それぞれの学校が地域の特性をふまえながら、何ができるのか、どうやってやるのかを考え、協力して実施していくことが大切である。

パネルディスカッション

杉浦氏～みんなが一致団結して取り組んでいくことが大切。現在、教員の研修に力を入れ、3日間コースの研修会を行っている。英語をしゃべるようになるのとは違い、



どう取り組みをしていくかという研修である。教育の機会均等ということで14教育

局はそれぞれの地域で取り組みをしている。小川氏～平成18年から町内3校で取り組んでいる。きっかけは昭和60年からオーストラリアと姉妹交流をしていたが平成17年財政難のため中止。もったいないということで年50万円の予算で取り組んだ。評判はとてもいい。ただ、先生方に温度差があるという課題もある。



安江氏～J-SHINのメンバーとして教育委員会などに営業に入っている。小学校英語の指導者＝外国人という神話がまだまだ通っているということにびっくりした。「教員免許がない。」ということで「先生じゃないでしょ。」と見下げられた経験もある。



吉田～教員免許もだんだん厳しくなっている感じがある。日本では学校現場に任せているところが大きい。世界的にみると

地域人材や教育委員会などと協力しているところが多い。学校に任せっきりにして失敗している市町村が多い。英語ノートもほとんどT Tで指導案ができています。DVDなどを作ってほしい。教員の英語のスキルは英検の3級程度あれば十分であろう。専科としての英語教員を育成するかは検討中である。言葉は道具であり、理科や音楽などでも使ってほしい。中学校の免許で小学校を教えていいかということが言われるが、小中で連携でおおいにやってほしい。逆に小学校の先生が中学校にいったT 2をやり中学校の様子も知ってほしい。



中山～おかみがやってくれるという考えではだめである。小学校英語を実践しているところで、「うちの子全然話せないんです。」と言ってくる親がいた。「話せないのは正常です。」と答えた。週1度で話せるようになるわけがない。しかしながら、親が学校の様子を見ると理解が深まる。話すこともそうだが、あいまい文化やノンバーバルのしぐさなど、文化の違いを知ることも大切にしてほしい。小学校では、「Can I ~?」はキャナイで、それでワンワードである。「What's your name?」ホワッチュウアネイムもワンワードである。それを分析

するのは中学校に行ったからでいい。



吉田～小学校でやると、中学校、高校は確実に変わっていく。できればこそ、小と中、中と高の連携を大切にしてほしい。大切なへ小学校英語は学力に関係なく活動できるということである。小学校英語は教科ではなく「活動」である。それぞれある地方本部がしっかりしてほしい。そして学校と常に緊張感を持ちながら連携してほしい。これまで環境教育など新たな取り組みが学校に入ってきたが、それに比べると、英語はテレビや歌でも子どもたちの身の回りにあり、やりやすいのではないだろうか。



まとめ

受け身ではなかなか始まらない。安江さんは、小学校英語指導者の草の根として教育委員会を回り、契約を取り付け、各地方で英語活動の実践を進めている。他の研修会でもそうだったのですが、小学校英語については、保護者は概ね賛成であるが、戸惑っているのは現場の教員の方である。ま

た、教員によって温度差が非常に大きいのも現実である。

私は、10年前まで中学校の英語教員をやっていました。英語は準2級をまぐれ合格という程度のスキルですが、中学校の教員をやっていて、そりゃあ、ペラペラしゃべれる方がいいに決まっていますが、子どもたちには英語の楽しさ、大切さを指導することができたと思います。小学校の英語の先生で、不自由なく英語を使えるという先生はむしろ少ないと思います。でも地

域の方は ALT と協力しながら授業をしていくってことはそんなに頭をかかえるようなものではないと思います。これから指導例などの DVD や指導プランなどもいろいろ出てくるでしょう。ちょっと前向きな気持ちでがんばってみるのも大切かと思えます。私も、英語教育に携わる者の一人として、いろいろな学習会に参加し、小学校英語活動の発展に微力ながら力をいれていきたいと思えます。